

## シンポジウム

## 小学校における英語教育必修化の是非について —日本人の英語コミュニケーション能力の涵養という視点から—

宮崎 修 二

(対日貿易投資交流促進協会)

### はじめに

国際的な発信力、受信力の向上のため、日本人の英語コミュニケーション能力をどう涵養するかという視点から考察したい。言語能力の基礎が固まる以前の幼児期に英語を学ばせれば、その後の英語運用能力醸成に有意な効果がある、という説は、言語発達学等の諸研究の結果、今や否定されつつある。いわんや小学校の2～3年間、形ばかりの英語教育を行っても、その効果は疑問であろう。こうした論点にとどまらず、小学校における英語必修化には、以下の通り多くの問題点があり、反対せざるを得ない。

### 《必修化反対の理由》

#### 1. 小学校という公教育における英語の位置づけの観点

- (1) 限られた時間と教員の体制の中、どの科目を小学校の教科とするかは、公教育における優先度を何に置くかという基本問題である。「ゆとり教育」の中で英語を教科化することは、他の科目の更なる切込みでしか対応できず、児童の基礎的な知識、能力の習得に少なからぬ影響を与える。英語の教科化により、国語を始め、日本人あるいは日本語を母語とする児童として身につけるべき基礎学力の育成がおろそかになれば、彼らの将来に大きな不利益を与えることになる。むしろ、小学校では、すべての学力の基となる国語教育にこそ力を注ぐ必要がある、という指摘は大方の頷くところであろう。
- (2) 論者が News English を学ぶ早稲田大学生に行ったアンケート結果で意外だったのは、一般に英語能力が高いとされる帰国子女の中に「小学生の時期はまともな日本語や基礎知識をしっかりと身に付けるべきであり、英語必修化の必要はない。」という意見が多かったことである。彼らは、英語が得意であるが故に、コミュニケーション手段である英語そのものより、伝えるべきコンテンツが重要と感じてきたのであろう。英語で挨拶や簡単な意思疎通ができたとしても、母国の歴史、文化、伝統といった基礎的な教養のない「根無し草」や、伝えるべき中身を持っていない人間は、国際化以前の問題として、早晚外国人に相手にされないことは、我々が良く見聞しているところである。

#### 2. 英語教育の目的及びその達成という観点

- (1) 仮に小学校において英語教育を必修化する場合、その目的をどう設定するのか。バイリンガルを養成するためなのか。はたまた、日本人全員に相当なレベルの英語力をつけさせるためなのか。そもそも日本人が英語を得意としないのは、我が国社会が英語

を常に必要とする環境、すなわち、英語ができないと社会・経済的に不利益をこうむるといふ環境にないからというのが最大の理由である。かかる社会では英語習得への強いモチベーションが国民一般に存在するはずはない。小学校における英語必修化が、こうしたモチベーションさえ良く理解できない段階で、国語能力等も不十分な子供たちに有無を言わずに行われるのは問題ではないか。むしろ国民一般については、正確で基本的な英語力のレベルアップを目指しつつ、我が国からの発信力や国際交渉力強化のため、少数であってもネイティブ並みの英語力をもつ者を確実に養成する、といった現実的な戦略が必要なのではないか。

- (2) その観点から、中学、高校、大学と連なる英語教育体系全体を点検し、その再活性化・強化のための改革を行うことこそ、今求められているのではないか。例えば、現在の中学、高校では、英語授業時間が縮小する一方、オーラル偏重の傾向があるが、これでは「まともな英語の習得」は困難と言わざるを得ない。外国人と意味あるやり取りができる英語力の基本は、「読解力」とそれに裏打ちされた「書く力」である。文法も含め、こうした基本を身につけることで、「聞く」、「話す」を合わせた総合的な英語運用能力が獲得できるのである。ともすると、「話込み」と批判される受験英語が、実は学生の英語力底上げに貢献していることは、大学における英語教育では常識である。

### 3. 実施可能性の観点

多くの論者が指摘している通り、英語教育の専門的知識、技能、経験のない現在の小学校教諭に現場での英語指導を行わせる一方、英語専門教員を特に拡充することはしないという行政の姿勢は、無責任のそしりを免れない。ALT等のネイティブも日本人に適した英語教育という点で必ずしも資質が高いとはいえないケースが多い。国は、音楽、遊戯等児童の関心を高める方法でギャップを補うことを推奨している。しかし、それで「英語を習得した」というのは、いささか御座なりではないか。小学校での英語学習の目標は「基礎的な英語運用能力、挨拶や、簡単な意思疎通を行える程度」とされているが、その程度のこととは中学校に入学してからでも間に合うし、すでに英語を必修として教える体制ができて中・高での英語教育をしっかりと行えば足りる。むしろ中・高での英語教育強化策こそ検討すべきである。

#### 《結語—なぜ小学校から始めなければいけないのか》

近時、国は「外国人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成や国際理解を深めることを重視すべき」として、早期英語教育の目的を微妙に変化させている。英語必修化の実施面での限界を自覚する一方、子供の負担増にならないか等の懸念を意識しているからだろう。「教科としての英語」それ自体が重要なのではなく、コミュニケーションを図る「態度」や「国際理解」が大切、という論理はそれ自体間違いではないかもしれない。だが、なぜ小学校から英語を始めるのかの説明にはなっていない。幼い頃から英語を学ばせれば、他国の人々の生活等に対する国際理解が深まる。このような飛躍した論理で、未来を担う子供たちに対する公教育政策が決められつつあることを、国民の多くは知らない。他国に対する国際理解は、まず身の回りの人々に対する他者理解から始まり、年齢とともに発達する理解力や視野の広がりに対応して培われるものではないか。英語学習と結びつけた特別扱いはやめた方がよい。

(注：文中、意見にわたる部分は論者の個人的見解である。)